



チャレンジし続けた 大学生活

文学部人文社会科学東洋史学専攻4年
木村 なつみ (静岡県立浜松北高校)



ミャンマーの JICA 事務所 (後列右端が筆者)

FLPの国際協力プログラム、国立教育

また自専攻以外にも教職課程、社会教育主事課程、SENDプログラム、

痛感する日々でもあった。彼らの歴史学研究に対する情熱に圧倒され、歴史学の奥深さを感じた。しかし同時に、自分自身の甘さや未熟さを

東洋史学専攻での学びは、とても充実したものであった。1年次よりアラビア語を学び、イスラームの基本的な歴史や、エジプト・チュニジア・中央アジア・東南アジアなどの各国史について学んだ。また3年次より、大学院のゼミを受講し、優秀な聴講生や先輩方、後輩たちに出会うことができた。彼らの歴史学研究に対する情熱に圧倒され、歴史学の奥深さを感じた。しかし同時に、自分自身の甘さや未熟さを

大学浪人をしていた時、予備校の世界史の先生が「史学科に進学したいなら、偏差値でなく学びたい地域や分野を研究している教授で選びなさい」とおっしゃった。この言葉により、自分は大学で何を学びたいのか、大学で学んだことを将来どう活かしたいのか、真剣に考えた。その時、世界中でテロなど残酷な被害が多発しているにも関わらず、東南アジアやアフリカではムスリム人口が急増していることを知り、疑問に思った。そこで、エジプトやアラブを研究している松田俊道先生の下で、イスラームの歴史やアラビア語を学んでみたいと思い、中央大学の東洋史学専攻を選んだ。

政策研究所社会教育実践研究センターでのインターンシップ、小学校特別支援学級での授業補助ボランティア、カンボジア人医療研修生への日本語授業ボランティアなど様々なことにチャレンジした学生生活であった。

東洋史学専攻との関連では、SENDプログラムで約1カ月間留学したマレーシアがとても刺激的な毎日であった。東洋史学専攻でイスラームについて学ぶ中で、在学中にイスラーム圏に行ってみた、イスラーム教徒と同じ生活がしてみたいと思っていたからだ。滞在中は、朝の礼拝を呼びかけるアザーンの声とともに起床し、生徒と一緒に

コーランを読んだり、モスクを訪れたり、宗教行事に参加したりした。その中でも、ハリラヤのハッジという行事が最も印象的であった。これは、イスラーム教徒の聖地メッカへの巡礼を祝うお祭りで、犠牲祭とも呼ばれる。裕福なムスリムが家畜を提供し、これらにイスラームの戒律に従って屠畜し、それらの肉を家族や親戚、貧しい人々に提供する行事である。私は、生きていく牛が屠畜され、食肉になる過程を目にした。改めて毎日食べ物が食べられる有り難味を感じた。これらの経験によって、大学での机上の学びを体験的な理解に変化させることができた。

4年間の大学生活では、松田先生を始め、様々な分野のスペシャリストに出会うことができ、大変お世話になった。多くの人に支えていただき、色々なことにチャレンジすることができた。これからも上手いかなんかこともたくさんあるだろう。しかし、「大学生活で頑張った!!」という気持ちを原動力として、諦めずに向上心を持って努力し続けたいと思う。

最後に、この大学生活を支えてくれた父親にとっても感謝している。経済的な面ももちろんであるが、いつも私を心配し、心から応援してくれる人がいるということが、どれだけ心強く有り難いかを思い知った。いつも一生懸命でストイックな父親の背中を見て育ったが、これからもそんな父親の背中を追いかけて続けたいと思う。いつもありがとう!!

最後に、この大学生活を支えてくれた父親にとっても感謝している。経済的な面ももちろんであるが、いつも私を心配し、心から応援してくれる人がいるということが、どれだけ心強く有り難いかを思い知った。いつも一生懸命でストイックな父親の背中を見て育ったが、これからもそんな父親の背中を追いかけて続けたいと思う。いつもありがとう!!

最後に、この大学生活を支えてくれた父親にとっても感謝している。経済的な面ももちろんであるが、いつも私を心配し、心から応援してくれる人がいるということが、どれだけ心強く有り難いかを思い知った。いつも一生懸命でストイックな父親の背中を見て育ったが、これからもそんな父親の背中を追いかけて続けたいと思う。いつもありがとう!!



日本語ボランティア

の
しな!
生活
vol.7

の様子を掲載し、ご父母のキャンパスライフの風景、またの情報を発信いたします。



2015年に台湾の国際会議で発表



私の大学生活を振り返ってみると、西洋史学専攻にとらわれず、やりたいことに向かって走ってきたな、という印象である。今回は西洋史学専攻での学びを紹介し、専攻の枠を越えたフアカルティリングゲージ・プログラム（通称FLP）、大学の枠を越えたグローバル・スタディーズ、1人旅についてお話ししたい。

「西洋史学専攻です」というと大抵、「どうしているの？」と聞かれる。多くの人はピラミッドの発掘や映画『ナショナル・トレジャー』『ダ・ヴィンチ・コード』など、ロマンあふれる謎解きや冒険を思い浮かべるかもしれない。私自身、入学するまではそんなロマンに満ちた世界を想像していた。しかし実際は、机の上で文献と

文学部生 リアル 学生

文学部生のリアルな学生生活
皆様に文学部生の充実したキ
文学部ならではの取り組み等

入学前に思い描いていた映画のような冒険には今のところ遭遇したことはないが、ここでの学びや指導教授である鈴木直志先生の講義は、私の知識欲を大いに刺激してくれている。

次に紹介したいのはFLPでの活動だ。自専攻である西洋史学の知識を深めるだけではなく、幅広い学びをしたこと、5つのプログラムに分かれている。私はジャーナリズムプログラムに所属しており、大橋正和教授のゼミにて現代社会の変容とソーシャルメディア研究をしている。始めた当初は西洋史学と研究方法も違うため、戸惑いもあったが、2014・15年度と台湾での国際会議で発表するぐらいにまで成長した。

にらめっこしていることが多い。自分たてたテーマにあつた史料を探し、難解な研究書や時には英語、ドイツ語の文献を手にとって読み解こうと日々努力し、集めた史料を手がかりに想像力を駆使しながら、過去の歴史をさかのぼっていく、そんな地道な学問であると感じている。

また、2015年2月にはニューヨークに研修に行き、企業訪問を行った。クリエティブシティおよびソーシャルメディアの調査研究を実施した。大好きな映画『ナイト・ミュージアム』の舞台、アメリカ自然史博物館を訪れたり、ブロードウェイで観劇したりと充実した研修だった。

FLPでの活動で海外旅行の味を占めた私は、今年2月にヨーロッパ3週間1人旅を敢行した。3週間で4か国10都市を回り、最後の1週間は文学部の海外研修制度である「グローバル・スタディーズ」を利用してデンマーク、コペンハーゲン大学で研修をした。研修では日本文化についてプレゼンしたり、異文化理解について実際に街を歩き、体感することを通して学んだ。この研修で会った人たちは今も交流があるほど、私にとって大切な人たちになった。1人旅では1人である不安に涙したこと、14歳に間違えられたこと、怒られてると思ったら靴を褒められていたこと、風邪をひいたこと、偶然会ったおじいちゃんに観光案内してもらったことなど、たくさんのお出来事があった。これらの経験は帰国した後、会う人みんなに「何か変わったね」と言われるほど、成長と自信をもたらしてくれた。



コペンハーゲン大学の学生と観光

専攻と大学の 枠を越えて学ぶ

文学部人文社会学科西洋史学専攻4年
尾張 実花子 (秋田県立能代高校)

